

人と防災未来センター



岸本くるみさん 小学2年生のときに被災し、救援物資として手に入れたえんぴつ。「おうぎだにやえ」という名前が彫られている。

人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災から得た教訓を財産として伝え、減災に貢献することと、いのちの大切さを世界に発信することを目的に設立された。小学2年生の時に被災した岸本くるみさんの話を聞いた。

小学生で被災した体験談を聞いて

阪神・淡路大震災の教訓を伝えようと建てられた神戸市中央区の「人と防災未来センター」で、小学2年生の時にこの災害を体験した岸本くるみさんの話を聞いた。被災当時に支援物資として受け取った赤いえんぴつを手に話す姿が印象的だった。



センター内の展示を、メモやカメラを使って熱心に取材



岸本さんは震災当時、神戸市兵庫区のマンションの7階に住んでいた。地震が起きる前の週に岸本さんが

の学校では席替えがあった。「3連休明けには新しい席に座れる」と楽しみにして寝ていた。そして、明け方に地震が起きた。最初は何が起きたか理解ができず、地響きや物がきしむ音、何かが落ちる音など、日常ではありえない音が暗やみの中から聞こえてきた。「ゴジラがマンションを揺すっているのかもしれない」と思ったが、周辺の建物が倒れたり、傾いたりしているのを見て、大きな地震とわかった。



武田知子 記者

電気、ガスなどすべてが使えず、生活できなくなったので、地震の被害が少なかつた市内の親戚の家へ引っ越した。学校では救援物資が配られている。岸本さんは赤色のえんぴつを選んだ。もらった時は、とても嬉しかった。ただよく見たら、「おうぎだにやえ」と名前が彫ってあった。岸本さんは、使うことに抵抗があった。



「人と防災未来センター」神戸市中央区協栄海岸通1-5-2

「人と防災未来センター」に勤務した後、大学の社会防災学科実習助手として働いている。

子ども記者プロジェクト 読まれる、伝わる記事を書くために～ワークショップ



子ども記者11人は取材後にワークショップ（編集会議）を行った。取材地別にグループをつくって記事づくりを進める作業で、取材内容を「事実」と「感想」に分けてカードに書く。そのカードを1枚ずつグループ内で発表して人の意見も聞くことで、重要なことをまとめた。それを元に一人ひとりが記事を書き、「子ども新聞」ができあがった。

